

# 兒童研究法講義 (二)

第四高等學校教授

松 本 金 壽

## 兒童研究法の輪廓

一

一口に兒童研究法と云つても、心理學・教育學・社會學・醫學といったやうな色々な學問領域からの研究法が含まれて居り、又夫々の學問領域の中でも、理論的な目的で行ふ研究法と實際的な必要から行ふ研究法とは自らの違ひがありますので、是等すべてのものを網羅した要領のよい解説を書くといふことは却々困難な仕事です。殊に今日のやうに色々な學問領域が相互に分化發達して、専門家でも自分の専門領域以外のごときはよく分らないといふやうな情況の下では、この困難さは一層です。兒童研究法といふことが非常に大切な問題として採り上げられてゐるのにも係ら

ず、研究法全體の概説といったものが未だ作り上げられてゐない第一の原因と思はれます。

第二の點は、兒童といふ概念が非常に廣く且つ漠然としてゐることだと思はれます。兒童といふ言葉は日常用語にも學術用語にも使はれ、至極便利な言葉で誰にでも自明な内容のやうではありますが、又それだけに非常に漠然として居り、使ふ人々によつて廣狹様々な意味が與へられて居ります。出生時から青年期までといふ廣い意味に用ひられてゐることもあれば、小學校在學期間中のもの即ち學童といふ意味に限つて使用してゐる人もありますし、未就學兒童といふ言葉がありますやうに、極く幼少期のものを指してゐる場合もあるといった工合にハッキリきまつた意味内容を持つてゐることは限りません。それですから、ここからでも手がつけられ易い代りに一貫した體系が建てにくく、

嬰兒期・乳兒期の方は片附いても學童期の方は未了であるといふやうなギャップが生じ勝なのです。

第三の點としては、兒童そのものに對する研究の困難さが擧げられます。兒童研究といふも何か一段學問的水準の低いもの、従つて又誰にでも出来る易しいこのやうに思はれ勝ですが、これは大變な誤解です。純理論的に云つて兒童ぐらゐる研究の困難な對象は少いでせう。兒童は我々と違つて精神的にも身體的にも急激に變化します上に、自制力に乏しい存在ですから、研究上のコントロールが難しいばかりでなく、兒童自身の經驗報告に多くの期待を持つことが不可能です。従つて科學的研究法の最上のものである實驗的研究法が遂行しにくく、大部分は自然的な觀察に頼らざるを得ない次第です。斯うした研究の困難さが、一方において研究の結果を不明確にし、他方において研究の進行を停滞させてゐます。一例を兒童心理學の歴史にまつてみませう。兒童心理學の最初の文獻はティーデマンの「兒童における精神能力の發達についての考察」だまされてゐますが、この研究が發表されたのは一七八七年ですから、現代の實驗心理學の誕生よりも約一世紀も古いわけですが、それにも係らず、現代の兒童心理學の發達は遙かに遅れてゐる状態です。

以上の三點の中、第一第二の點は兒童研究の領域が廣大

であることを示し、そこに概觀への見透しを困難にする直接の原因が潜んでゐるかのやうな印象を與へてゐます。然し乍ら、よく考へてみるに、兒童研究への概觀を困難にしてゐる究極の原因は、寧ろ第三の點にあるのではないでせうか。言葉を換へて云ひますならば、兒童研究法そのものにまつたる困難さが、研究の全領域を明確に分化體系づけることを妨げ、漠然とした不統一を結果してゐるやうに思はれてなりません。これは私一個の感想ではありません。アンダーソンも、兒童研究がいつまでも童話的形態に止まり、半科學的狀態に停滞してゐることを遺憾として、研究法の確立を急ぐべきことを強調してゐます。殊に東亞新秩序の建設といふ新課題を前にして、兒童教育の全面的革新が必要とされてゐる我が國では、兒童研究法に對して新しい認識を持つことが一層大切であらうといふことについては、前回の序言にも述べて置きました。

## 二

以上で兒童研究法の必要さといふことの概略を兒童研究それ自身の觀點から述べてみました。それでは兒童研究法の内容は一體なんものかといふことが次の問題となるでせう。前にも述べたやうに、兒童研究法の内容については未だ充分な體系づけが發表されて居りません。それから、初めに先づ大體の輪廓を述べて、凡その見當をつけ

て置かうと思ひます。

人間に限らず生物一般の生涯の中で、身體的にも精神的にも兒童期は目覺しい發達をする時期はないでせう。そして此の發達は幼少に溯れば溯るほど一層著しいものである。こゝは云ふまでもありません。それですから、精神の問題を取扱ふ心理學、身體の問題を取扱ふ醫學にまつて、兒童は又さ得難い研究對象である筈です。兒童心理學や小兒醫學といふやうな兒童研究の分野は當然起るべくして起つた云へます。然し乍ら、これは純理論的な推論に過ぎません。兒童研究といふものゝ最も力強い動機となつたものは、兒童福利の問題であり、兒童教育の問題です。我々の兒童は色々な學問的領域から研究される以前に、先づ何よりも教育さるべき對象であり、保護育成さるべき存在であります。これは個人的の意味からばかりでなく、社會や國家の立場から云つても同様でせう。

こゝで、教育の對象としての兒童は身體の方面さか精神の方面さかに分けられない全人的の存在です。クリスマンは兒童に關する科學的研究一切を含めた學問を兒童學 (paedology) と名づけ、これを兒童教育の基礎學としようとしたことは周知の事實ですが、兒童に關する科學的研究一切さいふやうに間口を廣げて了ふに、結局のこゝで、一種の概念學なるか、色々の分化科學を綜合するさいふ行

方をさるか何れかを選ばなければなりません。クリスマン以來、兒童學といふ言葉は屢々用ひられてゐますもの、今以てハッキリした内容を持つに至つてゐないのは、前項に述べたやうな事情に因るこゝと思はれます。そんなわけで、兒童研究法といふのは、本來兒童學の方法であるべき筈ですが、兒童學それ自身の内容が未だ漠然としてゐる今日、兒童學特有の方法といふやうなものを樹てるわけにはゆきません。そこで問題は兒童に關する科學的研究を行つてゐる學問領域の中で、比較的纏つた研究法を持つてゐるものゝ中から基本的なものを組み立て、ゆくのが最上の道と考へられます。

このやうな事情を考慮して、私は兒童研究法の輪廓を次のやうに定め度いと思つてゐます。兒童研究上、一番問題となるのは精神的方面の研究ですが、この方面の研究に重要な役割を果してゐるものは兒童心理學と教育心理學とでありますから、この兩者における研究法を述べることは、さうも直さず、兒童研究法の主要部分に觸れるこゝになると思はれます。それですから、私の兒童研究法も、兒童心理學と教育心理學との方法論を主體にし、これに身體測定法と社會調査法とを附け加へて、兒童學の二大目標である教育問題と社會問題の研究に役立つやうな仕組に致し度いと思つてゐます。尤も、從來兒童學の研究法とされてゐた

ものには測定法・臨床法・實驗法・治療及び診斷法等の大綱が示されて居り、兒童心理學の方法論としても偶然的觀察法・傳記法・系統的觀察法・質問紙法・事例法・品等法・テスト・實驗法等の大別が示されてはゐますが、このやうな一般論は問題の具體的解決に直接役立つやうに思はれますので、極く大體に止め、専ら記述の重點を具體的問題に對する研究法に充てる積りでゐます。例へば、兒童心理學の方法としては、運動機能・知覺・表象・記憶・言語・思考・想像・感情・意志等に關する研究法を述べ、教育心理學の方法としては、素質・學習・練習・作業・環境の影響等に關する研究法を述べると共に、夫々の方面における代表的な研究結果にも觸れて、實際の適用に直接参照出来るやうに配慮し度いと思つてゐます。

【附記】 以上のやうな配慮の下に、出来るだけ實際の役に立つことを目論んでゐるわけですが、それでも注意不足の部分が出来ることと思はれます。讀者諸氏の御質問によつて、出来るだけ此の點を補つてゆき度いと存じてゐます。

大君の命かしこみ磯に觸り海原わたる父母を置きて

(防人)

母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中にあへ纏かまくも

(防人)

防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず(防人の妻)